

日本人の「歩行形態」に関する研究

木寺英史

A Study of Japanese Walking form

Eishi KIDERA

江戸時代末期頃までの日本人の「歩行形態」は、画一化した特性を有していたと考えられている。この傾向は「ナンバ」の認知によって顕著となった。現在の「ナンバ論」は武智鉄二の解釈が基礎となっているが、その根拠となる「原初生産性」が「歩行形態」に適用されるか否か慎重に再検討する必要がある。

史資料を考察すると、当時の日本人の「歩行形態」には多様性がみとれる。「移動手段」としての合目的的な「歩行形態」だけでなく「表現手段」としての「歩行形態」も伝承されていた。しかし、その多様性の中にも日本人独自の歩行特性が存すると考えられる。それは日本の伝統的履物特性より導きだすことができる。それらの考察はすでに試みられているが、爪先に荷重し踵を接地させない「歩行形態」であるとされている。しかし、これらの考察は、足趾が屈曲位にあり、さらに履物の構造上台座から踵部が離れるため誤解されて観察されたことによるものと考えられる。

筆者はこれらとは異なる見解を有している。伝統的履物特性から表れる特性は、爪先に荷重することではなく、足趾が屈曲方向に動作することである。そして、足趾の屈曲は、着地脚足部ではなく主に遊脚足部の操作である。

今後は史資料やデータの収集により、日本に伝わる優れた身体操作法や動作性の基礎となる歩行特性を探りたい。

はじめに

日本人の「歩行形態」を考察すれば、江戸時代末期頃までのそれが、その後大きく変容したことは容易に推測できる。「歩行形態」に多大な影響を与えたのは服装と履物であろう。特に履物は「歩行形態」に決定的な変容をもたらしたと考えられる。

靴の起源は紀元前約 1600 年といわれ、欧州では紀元前約 200 年には、一般市民も靴を履く習慣がはじまるとされる。しかし、日本で市民が靴を履く習慣を有したのは明治 40 年代以降である。それまでは、草履・草鞋・下駄等を常用していた。これらから、日本人が欧米人とは異なる「歩行形態」を保持していたとすることに異論はないであろう。

2003 年に開催された世界陸上選手権大会（パリ大会）男子 200 メートルで末續慎吾選手が銅メダルを獲得すると、彼が語った「ナンバ」の動作や感覚が注目されることとなった。「ナンバ」は蘆原¹⁾が当初「舞踊」で用いていたが、その後、武智²⁾によって広く知られることとなる。武智の「ナンバ」に関する考察は、後に三浦³⁾や野村⁴⁾の「ナンバ論」に受け継がれている。しかし、こ

れらの論考により、当時の日本人がある共通した「歩行形態」を保持していたという誤解が生じた。筆者は、「歩行形態」に象徴される日本人の身体特性が画一的に認知されることに大きな危機感を保持している。「歩行形態」などの日常における無意識的動作が、スポーツや武道（武術）の技術や動作の基礎であるとすれば、日常動作の画一的認知は、それら技術や動作をも画一的にとらえる傾向にあることを意味している。

本稿の目的は、このような見地から「ナンバ」による「歩行形態」に関する誤解を解くとともに、江戸末期頃までの日本人の「歩行形態」を考察し、日本人の身体特性を踏まえたスポーツ・武道などの技術・上達論構築のための基礎的内容を提示することである。

1. 武智論とその矛盾

現在、広く認知されている「ナンバ」に関する解釈は、武智のそれ（以後「武智論」）である。つまり、前述した日本人の「歩行形態」の画一化傾向は「武智論」が大きな影響を与えたと言ってよい。ここでは、「武智論」とそれを引き継ぐ論考を考察することとする。

「ナンバ」による「歩行形態」について、武智は次のように述べている。

ナンバというのは、農耕生産のための全身労働においてとられる姿勢で、右手が前に出るときは右足が前に、左手が前に出るときは左足が前という形になる。つまり、現代人の歩行の体様において、手が足と逆の方向にふられる姿勢と、まったく逆の動きとなる。⁵⁾

これは、現在広く認知されている「ナンバ」による「歩行形態」の象徴的表現である。また、「武智論」を継承する三浦も

ナンバというのは、あるいは説明するまでもないかもしれないが、簡単にいえば、右足と同時に右手が出、左足と同時に左手が出る歩き方である。

二、三十年前までは、小学校の運動会などに必ずこういう動作をするものが二、三人はいた。整列行進などで、緊張のあまり、習ったとおりの歩行ができなくなるのである。他の児童が右手を出したところで左手を出してしまうから、前の児童の左手とぶつかってしまう。⁶⁾

と述べている。しかし、武智はこの「ナンバ」による「歩行形態」をさらに詳細に解説している。

ナンバの姿勢を説明するときに、よく、右足が出るとき右手も前に出す、というように説明される。しかし、これは正確ではない。

日本民族のような農耕民族（牧畜を兼ねていない）の労働は、つねに単え身でなされるから、したがって歩行の時にもその基本姿勢（生産の身ぶり）を崩さず、右足が前へ出るときは、右肩が前へ出、極端に言えば右半身全部が前へ出るのである。

しかし、このような歩行は、全身が左右交互にむだにゆれて、むだなエネルギーを浪費することになるので、生産労働の建て前上好ましくない。そこで腰を入れて、腰から下だけが前進するようにし、上体はただ腰の上に乗っかって、いわば運搬されるような形になる。能の芸の基本になる運歩もこのようにしてなされるのであって、名人芸では上体は絶対に揺れることがない。

ただし、日常行動では能ほど厳格でなくてもよいので、上半身の揺れを最小限にとどめる程度であるかもしれない。この場合、右足が出たときには右肩も少し出るが、背筋をしっかり伸ばして、背筋の力で肩の揺れを留め、エネルギーのロスを最小限とするように心がける。⁷⁾

また、野村も

ナンバとは右足と右腕をそろえて前に出したいいわゆる半身の構えのことで、簡単に言えば、農夫が鋤を手にして畑を耕す姿勢である。盆踊りなどでもそうだが、右足ができれば右手も同時に前に出るこのナンバが日本の芸能の基本なのだ。この姿勢で右半身、左半身と交互にだして歩行に移ると、歌舞伎の六方（ろっぽう）でその誇張された形がみられるようなナンバ歩きになる。幼稚園児たちを行進させようとする、右手と右足、左手と左足をいっしょにだして歩きだすことがあるが、日本人の固有の歩き方は、極端にいうとあんな形だったのだ。ただ、腕はほとんどふらない。したがって、右肩と右足、左肩と左足がいっしょにでるわけだ。

このナンバで勢いよく歩くと、一歩ごとに肩が左右に大きく揺れて、いわゆる「肩で風を切る」という格好になる。日本人が、ひざを曲げ、腰をちょっと落として歩くのも、ナンバ式だと歩くにつれてからだはどうしても左右に揺れるから、そうせざるをえないことがあるのだろう。⁸⁾

と述べている。

さて、「武智論」では、「ナンバ」が「歩行形態」の基礎である根拠を日本人が農耕民族であったこととしている。これを武智は「原初生産性」と名づけた。「原初生産性」とは、民族社会が成立時にすでにその民族特有のパターンが決定されるとし、そのパターンは不変であるとする。その民族の生産パターンがその後の行動原理を決定する立場をとる。原初の生産パターンが身体だけではなく、言語を決定し、リズム感覚をも決定すると武智は考察した。個々が、かりに農耕から遠ざかろうともそれは容易に変化するものではない。その民族の出発点が農耕である以上は、その後の身体所作を支配するとする。日本人のそれが農耕（水田稲作）であったため農耕の身体動作が定着したとするのである。武智は農耕生産の基本姿勢について

すべての労働的行動が筋肉の全身的な緊張を中心に行われ、したがって、全身の体位は筋肉の緊張にふさわしい半身（単え身ともいう。からだに常に一枚の板のようになっていて、どの部分もねじれたりしないから、その名がある。この語は舞の芸術用語にもなっている）の姿勢になっている。このように右半身が前に出て、左半身があとへ引かれる姿勢を、舞踊用語で、ナンバという。⁹⁾

としている。

さて、ここまで「ナンバ」による「歩行形態」とその根拠とする「原初生産性」について概観してきた。「原初生産性」についての武智の論法は見事である。しかし、「武智論」による日本人の「歩行形態」を検討すると、ある疑問点を指摘せざるをえない。農耕生産の基本姿勢いわゆる「ナンバ」が日本人の日常動作に影響を与えたことは否定しない。日本人の身体（姿勢や動作）に「半身姿勢」および「半身動作」が内包されていることは疑いの余地はなからう。再検討されるべきは、「ナンバ」が「右肩と右足、左肩と左足が同時に出る」つまり「左右の半身を繰り返す」という動作に転化するかということである。農耕生産の作業には「左右の半身を繰り返す」動作はみられない。「ナンバ」の姿勢を保持したまま作業（動作）するのである。武智自身も、

農耕における生産労働の特徴は、それが第一次産業であるからして、土に向かって農民の持つすべての労働エネルギーを注ぎこむよう身体行動することである。たとえば、鋤を土へ打ちこんで畑を耕すときでも、右手に鋤の柄を持ち、左手に柄頭を取り、その右肩を前へ、左肩を後方に、いわゆる半身に構え、右足を前方に左足を後方にして腰を据え、全身の筋肉を伸長収縮させつつ、土に向かって鋤を打ち込む。そうして半身のまま、軀全体をうしろへ引いて鋤を引き寄せる。¹⁰⁾

と述べている。

農耕の基本姿勢である「ナンバ」は「左右の半身を繰り返す」という「歩行形態」には転化しないのではないか。「ナンバ」による「歩行形態」とは「左右の半身を繰り返す」のではなく「半身姿勢」を保持したまま歩行ではないのか。このような「歩行形態」を「片踏み」ということとしよう。例えば、文箱を担ぐ飛脚や駕籠かき、または剣道（剣術）の動作は典型的な「片踏み」である。

これらの考察より、当時の日本人が「左右の半身を繰り返す」ような「歩行形態」を保持していたとする「武智論」は再考の必要がある。さらに、「武智論」では「ナンバ」による「歩行形態」が、明治政府の近代化政策により不連続に変化したとしている。しかし、それまでの日本人が「左右の半身を繰り返す」ような現在の「歩行形態」とは相容れない特性を保持していたとすれば、政府の施策によって短期間に「歩行形態」が変容するとは考えにくい。

2. 歩行の多様性

前項で「ナンバ」に関する誤解を指摘した。それでは、

江戸時代末期頃までの日本人はいかなる「歩行形態」を保持していたのであろうか。この課題を考察するにあたり、歩行に関する現代的認識を変容させる必要がある。過去から現在に「歩行」を時系列的に考察すれば、加速度的にその量（歩行量）は減少している。そして、それはますます顕著になっていくであろう。現在、先進諸国では「歩行」を移動手段としてとらえることは稀である。多くの場合、その目的は「歩行」自体へと帰することになる。ゆえに、「歩行形態」は画一化することとなった。逆に、時系列をさかのぼるにしたがい、歩行の目的さらには「歩行形態」も多様化に向かうこととなる。この傾向は、地域および民族に関わらず同傾向にあると推測されるが、ここでは、日本人のそれについて考察することとしよう。

筆者は、合理的身体操作としての「歩行形態」は「踵をふむ」ことであると提唱してきた。「踵をふむ」ことに関しては、宮本武蔵が「五輪書」・水の巻で次のように述べている。

足のはこびやうの事、つまさきを少うけて、きびすをつよく踏べし。

足つかひは、ことによりて、大小遅速はありとも、常にあゆむがごとし。

足に、飛足、浮足、ふみすゆる足とて、是三ツ、嫌ふ足也。此道の大事にいはいく、陰陽の足と云是肝心也。

陰陽の足とは、片足ばかりうごかさぬもの也。

きる時、引時、うくる時迄も、陰陽とて、右左／＼と踏足也。

辺々、片足ふむ事有べからず。

能々吟味すべきもの也。¹¹⁾

ここで述べられている「足つかい」は、いうまでもなく「技」としてのそれである。武術等の「技」は日常動作とは乖離すべきとの見方もあるが、筆者はその立場をとらない。「技」の基礎は「日常動作」にあり、それゆえに「日常」が修行の場となりうる。この立場から考察すれば、文中に当時の「歩行形態」の多様性を見ることができるといえる。

まず、留意されるべきは、武蔵が文頭に「つまさきをすこしうけて、きびすをつよく踏べし」と明記していることである。身体動作の表現は、それが明文化されたものであれ口伝されたものであれ、逆説的解釈を試みる必要がある。つまり、「つまさきを少うけて、きびすをつよく踏むべし」との表現は、他流にはない「足つかい」であることを強調したものにとらえなければならない。そして、日常の「歩行形態」が「技」に転化していると考え

えるならば、「きびすをつよく踏む」という「歩行形態」は当時の一般化したそれではないととらえられる。

つまり、流派または個人レベルにおいて多様な「足つかい」があったと推測され、それらを「嫌ふ足」として「飛足」・「浮足」・「ふみすゆる足」を取り上げていると考えられる。そして、同様に「飛足」・「浮足」・「ふみすゆる足」の基礎となる多様な「歩行形態」が存在したことを示唆するものである。

この傾向は江戸末期頃まで継続していた。赤羽根龍夫は、

幕末の達人といわれた北辰一刀流の千葉周作は（略）、踵を踏むことを批判しています。これは、つま先だって歩く軽快な江戸の町人の歩き方を千葉周作が取り入れたためではないかというのが私の説です。武士は踵に力を入れて歩いていたが、江戸っ子は突っかけ草履を履いて踵を少しも地につけないで歩いていたと、平山蘆江『日本の芸談』（昭和16年）にあります。幕末は町人階級の台頭が目覚しく、江戸の三大道場は町人や富農層で賑わっていたといわれています。¹²⁾

と述べ、武士階級以外の「歩行形態」が剣術の「足つかい」すなわち「技」に影響を与えた可能性に言及している。また、野村も「武智論」を引き継ぐ立場をとりながらも

古くは歩き方にも、腰をちょっと落としたすり足歩行や、腰高で足を交差させるようにだしてすすむ大工や鳶職の歩き方、若い娘の内股歩き、年増女の練り歩き、等々、多少誇張はあるものの日本舞踊でみられるような身分や職業や性別に特有な歩き方があったが、現在の日本ではそのような社会的ちがいはすっかりなくなった。¹³⁾

とし、当時の日本人の「歩行形態」の多様性を述べている。

また、昭和初期に、柳田國男は失われつつある「歩み方」について次のように述べている。

男女の風貌はこの六十年間に、二度も三度も目に立って変わった。（中略）肩を一方だけ尖らせて跨いであるくような歩き方もあった。袖を入れちがいに組んで小走りする摺足もあった。気を付けてみると、いずれも履物の影響が大きかったようである。¹⁴⁾

これらの資料から、日本人は多様な「歩行形態」を有していたことが分かる。筆者も、

武士には武士の、町人には町人の歩き方があったらしい。農民もまた異なる歩き方をしていたであろう。それらは、それぞれの職業に必要な動作の基礎となっていたとも考えられるが、それ以上に、歩き方によって、職業や身分などの「らしさ」を表現していたと思われる。¹⁵⁾

とし、移動手段としての合目的な「歩行形態」だけではなく「表現手段」としての「歩行形態」に言及した。また、「表現手段」としての「歩行」は歌舞伎に伝承されている。

総じて女形は足のはこびにつま先を強くつかへば気象の強い女形となり、男役は踵を強く踏みしめればしっかりとした男の性根が見える。（中略）男役のあるき方は、踵のおろし方に目安があるという話をしたが、江戸ツ子の足どりはその中でも特別だ。江戸ツ子という役柄を、切られ与三郎で代表してそのあるき方を説明しよう。与三郎は足は踵でもなく、爪先でもなく、足の小指のつけ根あたりからまづ下ろして親指のつけ根の方へ及ぼすというやり方で、どつちかと言えば踵はすこしも地につけない。それは、江戸ツ子特有のつゝかけ草履を実際に穿いて見ればすぐ判る。踵をかばつてやらねば踵がよごれるからだ。さういう足の運び方で、而も膝をまげずに前につき出しながらあるく、（後略）¹⁶⁾

すでに述べたように、「歩行形態」は民族や地域性にかかわらず、時代が下るにしたがい画一化する傾向にある。これらの史資料から現在の日本人の「歩行形態」に比して、当時の日本人は多様な「歩行形態」を有していたと考えられる。

3. 日本人の歩行特性

さて、「ナンバ」の解釈の矛盾を指摘し、日本人の「歩行形態」を考察してきた。日本人の歩行には多様性がみてとれる。しかしながら、その多様性に共有する特性はないのか。その特性は四肢への着目からは導きだせない。そのような可視的な考察ではなく、日本人の歩行に潜む不可視の要素に着目しなければならない。その不可視の要素とは、日本の伝統的な履物特性による動作観察である。日本人と欧米人では履物に関して決定的な差異がある。このことに関しては詳細に論ずる必要はなからう。冒頭でも述べたが、2000年間以上の靴着用の歴史を有する欧米人に対し、日本人の靴着用期間は100年にも満たない。その間、日本人は独自の伝統的履物を着用していた。言うまでもなく、「草履」・「草鞋」・「下駄」など

である。

これら伝統的履物から日本人の歩行特性を探る試みも行われている。野村は次のように述べている。

歩くとき、ヨーロッパ人などは両足の拇指球（親指のつけ根）に交互に重心をかけていくが、日本人は一般に足先の親指に力を入れて、履物を足の先でつかけるようにして進む。草履や下駄の鼻緒はそうしてはじめてしっかりとしまるわけであり、また日本人がスリッパやつっかけなどを好んで履くのも、そんな歩き方のかんがえるともっともなこととおもわれる。拇指球に重心をかけて歩く西洋人にはスリッパは脱げやすいし、踵から足をだすから、履物はたとえスリッパのようなものでも踵がしっかりしていないと歩きにくいのである。反対に、親指でふんばるようにしてあるく日本人は、履物の踵の部分がほとんど役にたらず、むしろ草履でもスリッパでもすこしでも長すぎると、はいて歩くとパタパタという不愉快な音を響かせることになるわけだ。¹⁷⁾

そして、さらに台座が前足部分しかない「足半」を取り上げ、

踵のないこのような履物の存在は、爪先で地面をけるようにして歩く日本人の歩行様態をよく反映しているといえる。¹⁸⁾

と述べている。つまり、鼻緒があり、さらに足趾部に台座がない履物特性から生じる歩行は、拇指球よりもさらにつま先（第一趾）に荷重するととらえている。武智も、

考えてみれば、日本人の履物は、草履でも下駄でもあとがけがない、これは爪先で足裏をかえす歩様と、決して無関係ではないのである。また、日本人が愛する西洋式の履物は、スリッパやサンダルで、靴を履くと足の疲れを覚えやすいのも、あの重い履物を、一足ごとに、ひっくりかえしながら運ぶせいであろう。¹⁹⁾

と述べている。さらにラフカディオ・ハーンは日本人の下駄での「歩行形態」について、

人々は皆がつま先で歩いている。（中略）歩くときはいつもまず第一に足指に重心が乗る。実際、下駄を用いる場合にはそれより他に方法がない。なぜなら、踵は下駄にも地面にもつかないから。真横から見ると楔形に先細りした下駄に乗って足は前のめりになって前進する。一足の下駄に足を乗せて立つだけでは慣れないものには

むつかしい。でも、日本の子供たちは少なくとも三インチ（七・六センチ）の高さの下駄をはいて、鼻緒を親指と次の指の間に引っかけてだけで全速力で走る。彼らはつまづいて倒れることもなければ、下駄から足が抜け落ちることもない。大人がはくのは木で出来た台に五インチもの歯をつけた高下駄で、床几の漆塗りの小型模型と言った具合だが、それを履いて男たちが歩き回る格好はなお一層奇妙である。彼らは足に何もはいていないかのように大股で思うさまに歩く。²⁰⁾

と述べている。

「下駄」と「草履」や「草鞋」では、その特性に差異があるが、ここでも明確につま先への荷重が強調されている。鼻緒があること、足趾部分に台座がないこと（草鞋）、さらに踵部分に台座がないこと（足半）などの履物特性から、第一趾に荷重（ふんばる）し踵を接地させない歩行特性を導きだしている。

しかしながら、筆者はこれらとは異なる見解を有している。鼻緒があることから表れる動作特性は、爪先に荷重することではなく、第一趾と第二趾によって「鼻緒」を「はさむ」もしくは「つまむ」ことである。「鼻緒」を「はさむ」または「つまむ」ことは、第一趾と第二趾を屈曲（底屈）方向に動作させることである。足趾部分に台座がないことも同様である。地面を「つかむ」ように足趾を屈曲（底屈）させることが容易になる。つまり、これらの伝統的履物を着用した場合の足部の動作特性は、爪先に荷重するのではなく、足趾の屈曲（底屈）方向への動きが顕著になるととらえなければならない。靴を着用した場合でも、足趾を屈曲（底屈）させることは可能であるが、足全体を包み込む構造上著しく制限される。

日本の伝統的履物の着用によって、爪先に荷重するととらえられるのは、足趾が屈曲位にあり、また履物の構造上台座から踵部が離れるため、誤解されて観察されたためであると考えられる。また、それらの履物を着用した際に、足趾が屈曲し特に第一趾に強い「荷重感」があるために、足圧中心点が爪先に移動したと錯覚したものと考えられる。

さらに、足趾が屈曲し鼻緒を「はさむ」または「つまむ」操作は、着地脚足部の操作ではなく主に遊脚側の操作であることを明記しておかなければならない。履物が足部から脱落しないためには、離地直前から遊脚期において足趾を操作する必要がある。そして、ここで注目されることは、足趾が屈曲するためには足底の筋群が収縮し、相対的に踵部がさがることである。これらの操作により、台座の踵部は不要となる。つまり、足半に踵部の台座がないのは、歩行時に爪先に荷重し踵が上がるため

ではなく、遊脚期に踵がさがるためであると考えられる。

むすび

「武智論」により、「ナンバ」による「歩行形態」が「左右の半身を繰り返す」とする誤解が生じた可能性を指摘したが、さらに大きな誤解が認知された。それは、伝統的に日本人の身体操作はすばやい動きに対応できないということである。江戸時代末期頃までの日本人の「歩行形態」を画一的に「左右の半身を繰り返す」ものであるとすると、それが基礎となる身体操作は緩慢なものとしてイメージされることとなる。

しかし、日本には相撲・剣術・柔術、またその他武術には優れた身体技法が伝承されている。これらの動作性の基礎が、当時の日本人の日常動作に潜在していたと考えられる。日本人は「歩行形態」は多様であったが、既に述べたようにその多様性の中に、足趾を屈曲させる独特な歩行特性が潜んでいたのではないか。そして、足趾の屈曲傾向から導かれる動作特性が、靴を着用することでは獲得することは決してなかった日本人の優れた身体操作法や動作性の基礎となっていた可能性は否定しえない。

伝統的な日本人の歩行や動作特性は科学的データで示すことは難しいが、今後は可能な限り史資料等の収集により、日本に伝承される優れた身体操作法や動作性の基礎となる歩行特性を探りたい。

注釈)

- 1) 葦原英了、シャンソン・バレエ・舞踊などの評論家。「ナンバ」に関しては「ナンバン」として「思想」(岩波書店、1941年7月号)で発表している。
- 2) 武智鉄二、歌舞伎・映画等の演出家、評論家。『伝統と断絶』(1969、風濤社)・『舞踊の芸』(1985、東京図書)などで「ナンバ」について詳細に論述している。
- 3) 三浦雅士、文芸評論家。『身体の零度』(1994、講談社)により武智の「ナンバ論」を紹介している。
- 4) 野村雅一、民俗学者。『身ぶりとしぐさの人類学』(1996、中央公論新社)で、「ナンバ」および「歩行」について詳細に論じている。
- 5) 武智鉄二『伝統と断絶』(1969、風濤社) 27頁

- 6) 三浦雅士『身体の零度』(1994、講談社) 132頁
- 7) 武智鉄二『舞踊の芸』(1985、東京図書) 148頁
- 8) 野村雅一「しぐさの人間学」(『日本経済新聞』) 1998.10.14日付
- 9) 前掲書 7) 147頁
- 10) 前掲書 7) 147頁
- 11) 宮本武蔵『五輪書』(1963、徳間書店) 84-85頁
- 12) 赤羽根龍夫『江戸武士の身体操作・柳生新陰流を学ぶ』(2007、スキージャーナル社) 54頁-55頁
- 13) 野村雅一『身ぶりとしぐさの人類学』(1996、中央公論新社) 13頁-14頁
- 14) 柳田國男「明治大正世相史編」1-8足袋と下駄『柳田國男全集26巻』(1990、筑摩書房) 45頁-46頁
- 15) 木寺英史「武道と身体」(『日本文化のかたち百科』、2008年、丸善出版) 639頁
- 16) 平山蘆江『日本のげい談』(1949、和敬書店) 13頁
- 17) 前掲書 13) 12頁
- 18) 前掲書 13) 13頁
- 19) 前掲書 5) 26頁
- 20) 小泉八雲「盆踊り」(小泉八雲著・平川祐弘編『神々の国の首都』、1990、講談社) 107頁